台湾への「恩返し」コンサートの旅

―「日本の歌」でつなぐ日台の絆―

「日本の心を歌い継ぐ会」代表・ソプラノ歌手
森 敬恵

台南東門教会のシルバー大学で歌う森敬恵さん

長老教会、原住民の方々を訪ねる旅

――森さんは昨年十一月八～十二日、台湾の、特に原住民の方々を訪ねて「日本の歌」のコンサートを行われ、大変な好評を博したと伺いました。本日は、現地の方々との交流の様子など、お話をお聞かせいただければと思います。

まず、今回の台湾でのコンサートはどういう経緯で

行われることになったのですか。

森 台湾には私も何度かコンサートにお呼びいただいて、大変お世話になったということもありますが、三・一一の東日本大震災の時に、台湾の方々が本当に篤(あつ)い気持ちを寄せてくださったでしょう。世界で一番多くの義援金を送ってくださったのではないですか？

――最終的に二百億円ですから、圧倒的な金額ですね。

森 私、台湾に「恩返し」をしたいと思ったんです。それで「台湾の方々に『ありがとう』と恩返しをしたい。コンサートを無料でやりますから、受けてくださる方があったら」ということを、台湾と日本を行き来されている藩英仁先生に申し上げたのです。そうしたら呼びかけてくださって、いくつかの団体から応募があったのですが、中でも一番熱心だった長老教会のお招きに応じることにしました。

――長老教会はプロテスタントで、台湾最大のキリスト教教会ですね。今回、特に原住民の方々を中心に訪ねられたのはどうしてですか？

森 台湾全ての人たちにお礼するということはできません。これまでは大きな都市でコンサートをしてきましたから、今回は普段行かないところに行ってみたいという気持ちがありました。

少数民族の方々は、戦前は「高砂族(たかさごぞく)」と呼ばれて、日本人と一緒に大東亜戦争を勇敢に戦った人たちだったということも聞いていましたので、そういう方々にぜひ日本の歌を聞いていただきたいと思いました。

――お一人で行かれたのですか？

森 私一人で行きました。台北で藩先生と長老教会の黄哲彦牧師にお迎えいただいたのですが、移動に次ぐ移動で大変なスケジュールでした。

宿に入るのにも儀式

――十一月八日に台北に到着されて、すぐ台南に向かわれたのですね。

森 十一月八日は台南に宿泊して、翌九日の午前九～十二時、まず台南東門教会のシルバー大学の三クラスで歌いました。コンサートは「さくらさくら」「荒城の月」「故郷」といった唱歌を中心に行いました。

――台湾の方が知っている歌もありましたか？一緒に歌ったりとか。

森　「一緒に歌いましょう」と言って歌えた曲は何曲もありました。「ああ、そうだった」と言いながら記憶が蘇るんですね。でも台南のシルバー大学の方々は忘れている人が多くて、聞いたことがあるような、ないような――という感じでした。場所によって、昔のことをよく覚えているところと、あまり覚えていないところの差はありました。

シルバー大学で三時間演唱した後、今度は屏東というところに行って、少数民族の方々を訪ねました。

――屏東は台南のさらに南ですね。

森　宿に着いてまずびっくりしたのは、日本と同じように靴を脱いであがったことです。それから、一族になるための儀式があるんですね。歌を歌ったり、現地の言葉を覚えたり、花冠をかけてもらって踊ったり――親交を深めて、一族として認められて、初めて宿の中に入れるわけです。

それで、中に入って落ち着く間もなく、今度は玉泉教会へ行って、夜の八時から十時過ぎまでコンサートを行いました。

玉泉教会は、牧師様も奥様も少数民族の方で、パイワン族の牧師様とアミ族の奥様が一緒になってされています。それで現地の食事をしたら、日本の食事とそっくりなんです。豆腐を煮たものとか、魚を揚げたものとか、かぼちゃが出てきたり――。日本の味付けと似ていて、「これ、田舎の家庭料理じゃない」という感じのものがいっぱい出てきました。

食事にも感動したのですが、何よりもすごかったのは、彼らの情熱です。私は朝九時から三時間歌って、それからすぐ屏東へ行って、屏東で先ほどの儀式をやって、休むこともできないまま、また移動でしょう。移動、移動で休みが全然ないんです。それで夜の八時から十時過ぎまで歌って、もうヘトヘトでした。

それで、翌日の朝からまた、予定になかった飛び入りのコンサートをしてほしいって言うんです。「すごくいいからまた歌ってくれないか。来年も来てほしい」って、熱心に頼まれました。ものすごく喜んでくれて、現地の方々も懐かしそうに聞いてくれたんですが、そんなにしたら私が倒れてしまいますから、さすがに出来ませんでした。

ルカイ族の皆さんと

おばあさんが踊ってくれた

「日の丸」を踊ってくれたおばあさん

――十日の夜はルカイ族の教会を訪ね、そこで印象的なおばあさんに会われたそうですね。

森　そうなんです。八十八歳のおばあちゃんなんですが、すごくピンシャンしていて、「私、日本の歌全部歌える。踊りも覚えてる」って言うんです。それで、「日の丸」の歌の踊りをしてくれたりして、たくさん踊ってくれました。

終わった後に、部族の長の方から「あなたは私たちに貢献してくれたから、ルカイ族にします。あなたはもうルカイ族です。必ず帰ってきなさい」と言われ、ネックレスやブレスレットをいただいて、とても感謝されました。

――十一日は台中ですね。

森　台中の豊原教会には、日本の教育を受けた女性がたくさんいらっしゃいました。習字の先生とかお花の先生とか、シルバー大学の先生をしている方がい

らっしゃって、私はその習字の先生から日本語の徳川家康の言葉を贈っていただきました。

みなさんとてもあたたかく迎えてくれて、日本のことをすごく大事に思ってくれていることを感じました。かつての日本人が残した心が息づいていることが嬉しかったですね。どこを訪ねても私を大事にしてくれて、みんなに知らせようということで、とにかく移動、移動の旅でした。

台湾の悲しい歴史に触れて

――そこからまた台北に戻られたわけですね。

森　そこで、私は台湾の悲しい歴史に触れることになりました。

台湾は戦前は日本の統治下にありましたが、戦後は中国から入ってきた国民党が支配することになりました。それで、日本を大事に思う人たちがたくさん殺される事件が起きたんです。

――一九四七年の二・二八事件ですね。当時の台湾は、「白色テロ」と呼ばれる恐怖政治が行われていました。

森　十一日に台北に移動して、翌十二日に新北市の汐止教会というところに行きました。

そこで私は黄哲彦牧師のお父さんにお会いしたのですが、実はそのお父さんが、国民党に虐げられた方だったのです。学校の先生をなさって頭のいい方なのですが、お父さんにお話をお聞きしたら、日本の教育を受けて、軍歌を歌いたくて山の中で歌っていたら誰かが密告して、つらい思いをされたそうです。

黄牧師は、自分の父がこうなったということを一言も言われませんでした。品のいいおじいさんなんですけど、お父さんの顔を見た時に、なんでこんなに悲しそうなんだろうっていう顔をしていて、他の人と顔が全然違うんです。お父さんにそういう歴史があって、それで黄牧師が私を呼ばれたんだなということが分かりました。

それで日本の歌を歌ったら、お父さんが喜ばれてね。「自分の青春が甦って、日本人の気魄に元気付けられたあの頃を思い出した」と言って、すごく寂しい顔をしていたのが二コニコし始めて――。

――翌十三日の三峡教会も、黄牧師のお父さんが一緒に来られたのですね。

森　そうなんです。三峡教会は山の奥の方だったのですが、そこにはお父さんの教え子がいらっしゃって、教え子たちと一緒にコンサートをやりました。そうしたら、お父さんが「日本の歌を歌おう」って皆さんに声をかけてくれました。

私は軍歌や「青い山脈」といったものも持って行っていたのですが、向こうでは聞いてはいけないということになっていたので、知らない人が多いんです。以前、台北で千人規模のコンサートをやった時は、全員で「青い山脈」を歌いました。都会の人はみんな知っているんですね。でも、辺境の地にいる人たちは封鎖されていたから知らないと言っていました。こんな差があったんだと思いながら、童謡を主に歌いました。

黄哲彦牧師（右）とお父さん（左）

演唱が終わった後、お父さんがすごく感動されて、「僕が招待するから、来年もぜひ来てくれ」と言われました。寂しそうな顔がニコニコするんだから、これは行くしかないと思って、お父さんに「行きます」と約束してしまいました。私はこれで「お礼参り」は終わりだと思っていたのですが、ここからが「出発」になってしまいました。

お父さんは今でも台東に住んでいて、台東から息子たちがいる台北まで、わざわざ出てきてくれたんですね。台東は台湾の南の方ですから、とても遠いんです。その台東には、国民党によって日本を大事に思う人たちが入れられた刑務所が残っていて、来年はこの刑務所に行こうと誘われました。

貧しい生活からの「義援金」

――今回の台湾の旅を通して、どのようなことを感じられましたか。

森　日本よりも台湾の方が国が若いですね。街の中に若い力が溢れていました。日本では若者はスマホをいじって下を向いていますが、台湾では若者がそこここでバスケをやったりしていて、活気に満ちていました。一昔前の、私たちが若い頃のような活気が、台湾にはあるんです。これが今の日本にはないんだなと思いました。それから、家族の絆がすごく強いです。黄牧師のところは、あんなに遠く離れていてもしょっちゅう行き来があるそうです。

日本のかつてのエネルギーを台湾に見て、日本を再生させるのために台湾の力を借りたいと思いましたし、一方、台湾の人たちは日本という友だちをもっと親しく身近に感じたいという思いが強い。日本の心が台湾に行って、行ったものがまた日本に帰ってきて――その中で、私たちも学ぶし、向こうも喜んでくれる。こういうつながり、絆が大事なんだということを感じた今回の旅でした。

――東日本大震災の支援への感謝に対する反応はいかがでしたか？

森　少数民族の方々を訪ねてびっくりしたのは、彼らの生活は日本人に比べてとても貧しいんです。その中から義援金を出してくれたんですね。

私がお礼の言葉を述べると、みんなニコニコして「人間として当然です」「私たちも日本にお世話になりました」なんて言ってくれて、嬉しかったですね。その笑顔が忘れられません。

私たちは中国、韓国、北朝鮮といった近隣国に囲まれていますが、その中で何と言っても台湾は日本を大事にしてくる、かけがえのない国です。大変苦労してしんどかったですけど、とてもいい旅でした。

今年は一人でしたが、一緒に行きたいと言ってくれる仲間もいますので、来年は十名ぐらいで行って、台湾の方々との交流をさらに深めていきたいと思っています。

（二月七日インタビュー／鈴木）